

I 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだから」：3。

1. これからの幸福な使信（「幸いです」の原語：祝福されている、神から恵まれているの意）には明確な順序がある。この第一の使信は、当然最初に来るべきものである。これがなくては、天の御国に入れないからである。神の国には、心の貧しくない人は、ただの一人もいない。これは、天国の市民の根本的性質。他の性質は、この性質の結果として現れて来る。

2. 「心の貧しい」という本当の意味は、「からにする」ということ。これに対して他の使信は、満たされていることの表れ。「心が空になる」とは、自分を誇る誇り、自己過信が、砕かれる事。これまで自分が頼りとして来たものの空しさに気づき、それらを心の外に出す。その分、心が空になるスペースが出来る。その空になった心に真の満たし主の素晴らしい神を迎える。自分の力の限界を自覚し、神なしの人生の空しさに気づき、自分自身を頼まず、心から神に抛り頼むしか真の道はないと深く自覚する心。

「私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした」Ⅱコリント1：9。

神は、私達が、心貧しく、心が空になるように、私達を愛しておられるので、色々な事を通して、私達の高慢、高ぶり（神を追い出し、自分が神になろうとする心、神に頼らず自分の力で、自分の思うようにやろうとする心）を砕かれる。私たちは、まず心が空にならなければ、満たされることはできない。福音には、この順序がある。倒すことと立ち上がらせること。罪の自覚と罪の赦し、解放。この使信以上に、信仰のみによる義認を述べた言葉はない。他のすべての幸福の使信の基礎。これは、私たちの心を鋭く探るテスト。主の山上の説教に真正面から向き合う時、自分の力で実行し得ることができるものはないとわかる。ここで主が言われたのは物質的貧しさではなく、心の貧しさ。究極的には、自分自身に対する態度。ここで明らかにされようとしているのは、私たちが他の人前にいることを考えているのではなく、神の前に立っていることを考えている。人が御前にあって、徹底的に心の貧しさ（神なしでは真に無力な自分であるという自覚）以外の何かを感じているなら、神の御前に自分を置いていない（人の前に、人との比較の中に自分を置いている）。人との比較の人生ではなく、神の前に生きるとして下さい。

3. 心が貧しいとは、聖書が最大の価値を認めている謙遜（自分の弱さを認め主の栄光を現す）な心である。エペソ4：2でも、神の救いの恵みに相応しく歩みなさいという御言葉の最初に出て来るのは＝「謙遜と柔和の限りを尽くし」。

山上の説教で、エペソ人への手紙で、謙遜が最初に出て来るのは、偶然ではない。なぜなら、天の御国＝素晴らしい神との永遠の命の交わりから遠避けられた最大の罪は、謙遜の反対の人間の高ぶり、高慢だったから。

→最高の天使だったのに神のようになろうとして高ぶり悪魔となったサタンの

人への誘惑の言葉＝「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり」創世記3：5。「こうして、神は追放し」3：24。自分が神となり神に抛り頼まな

い罪から救われ、神との交わり（天の御国に入れる恵み）を回復できる条件は、高ぶりが砕かれ、心貧しくなり、謙遜な者になり神に拠り頼み、神に栄光を帰す。

「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます」（Ⅱコリ4：5）。

「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました」（Ⅰコリ2：3）。人々はパウロについて「彼は弱々しく、その話しぶりは、なっていない」（Ⅱコリ10：10）とさえ言っていた。世と世のやり方、世の価値観が、教会のものの見方とあり方に影響を及ぼされないように目を覚まして祈りたい。物事をその表面的な価値に基づいて理解することを止め、神の視点に立つことができるように。

「私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません」（Ⅱコリ5：16）。

心が貧しいとは、臆病や勇気を欠く事、引っ込みがちになることではない。生まれつきの気質ではない。個性の抑圧でもない。神から与えられた個性（自分らしさ）を押し殺し、仮面を装って生き辛くすることではない。

では、「心の貧しい者」とは？ 御言葉が言い表している→

「わたしは…心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである」（イザヤ57：15）。

心が貧しいとは、高慢さが全くなく、神の前に自分は何者でもない意識していることである。自分の素質、才能、学歴、経験に依存しない。神に徹底的に拠り頼む。

Ⅱ「天の御国はその人のものだから」。

天の御国とは「神の国」のことで、神の国とは、原語で「神の支配」の意。「心（原語：霊＝神と交わられる部分）の貧しい者」とは、自分の高ぶりが砕かれ、自分の無力さを認め、へりくだり、主を信じ、心から神に拠り頼む人。その人は、神に救われ、霊、心が変わえられ続ける。自分が自分の心を支配していたが、自分が砕かれ、自己過信が心から追い出され、心が空になり、その空の心に神をお迎えする。すると、神が心を支配して下さり、まず、私達の心から神の支配＝神の国が始まる。神との交わりが回復し、人生には困難は、皆、あるが、一つ一つ、神に伺い、拠り頼みつつ生きることができる。時満ちて、地上での使命を終え、死を迎えるが、主にある死は、滅びではなく、天国への入り口。

「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる」ヤコブ4：6